

どぶCHANG帝国

そして私たちは
堕とされる

純愛と執着と
溺愛と調教と

狂愛と催眠と

彼と私と彼の十年

Doomed to the Dragon

著 どぶ

STORY

桜舞い散る入学式の日

主人公は二人の男の子に出会う。

神秘的な瞳を持つ“竜弘”

爽やかな体育会系の“勇人”

ミステリアスな竜弘に惹かれつつも

勇人と付き合うことになる。

しかし竜弘の“不思議な力”で

催眠にかけられ“淫紋”を

植え付けられてしまう主人公。

恋人の勇人には秘密で

何度も竜弘と関係を結んでしまう

主人公に待ち受けるものとは——

CHARA



龍宮寺 竜弘

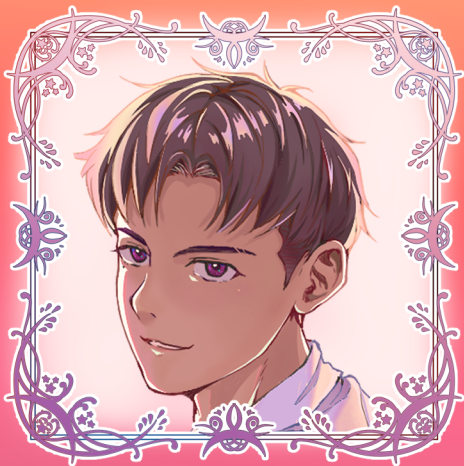
どこか陰があり謎曲いている。

祖先の力を背負い

他者を思いのまま操れる。

不可思議な魅力に包まれた彼に
一目惚れする主人公だったが・・・

CHARA



早瀬 勇人

明るく爽やかな体育会系。
周囲に活気を与え、人懐こいた曲
誰とでもすぐに打ち解ける。
大の仲良しの主人公に
告白をするが…

プロローグ

風が小さな街を包み込んでいた。桜の花が春風に舞い、高校の門をくぐる学生たちの歓声が街を彩っている。

「あぁいい天気……！友達、出来るかなあ」

今日は入学式の日だった。私は新たな人生のはじまりに心躍らせながら高校へと足を運んでいく。家から少し離れた街の、閑静な住宅街の外れにあるこの高校。先月の合格発表以来のこの場所に足を踏み入れた私は肩まで伸びたキレイな黒髪に揺れる陽の光が、心までも輝かせるのを感じ

じていた。

幼いころから明るくて社交的な性格だったが、どうも季節の変わり目が苦手な私は不安げな気持ちを抱えたまま入学式の日を迎えた。残念ながら中学まで同じだった人は偶然にも誰もいない。友達や親からは「あんたは人懐こい性格だから大丈夫」と太鼓判を押されたが内心は緊張でバクバクだ。初めての制服に身を包み、新たな学び舎への期待と緊張が入り混じった気持ちで足早に学校へと向かっていた。

学校の校門をくぐると、広い中庭には既に多くの新入生たちが集まり歓声やざわめきが交錯していた。初対面の仲間たちとの出会いに胸が高

鳴る私。

その中で、私の視線は異彩を放つ同じ新入生らしき少年に引き寄せられる。少し遠くで佇んでいた彼は、独特な雰囲気をもっており、周囲とは一線を画す存在だった。私は彼のそばに半ば無意識で近づいて行った。

「は、初めまして、美弥と言います」

やばい。美しすぎて、つい声をかけてしまった。気になった物事にはすぐに猪突猛進な性格が出てしまう。

私が挨拶すると、彼は深い瞳で私を見つめる。

「こちらこそ、初めまして。……竜弘です」

その独特な雰囲気とは裏腹に、彼の声は柔らかく、私はその瞬間から彼の不思議な魅力に引かれていく。身長は私よりも高い。180センチ近くはあるだろう。でも不思議と威圧感は無かった。

「お、おんなじ一年だよね？よ、よろしく」

とりあえず微笑んで、ぎこちなさを誤魔化す。

「ん……。よろしく」

その時、遠くから男の子の声が聞こえてきた。

「おーいタツ！」

私たちは揃って声の方向を向く。声の主はいかにもスポーツ少年といった風貌で、爽やかさを背負って走りぬけてきた。

「よおタツ！卒業式以来だなあ！」

どうやら竜弘君の中学からのお友達らしい。竜弘君よりもやや背が高く、短く切りそろえた黒髪が風に揺れる。程よく日に焼けていてピカピカのブレザーの上からでも筋肉質な身体なのが分かった。わあ、羨ましい。知り合いが誰もいない高校に進学した私はそう思った。

「久しぶり」

「相変わらず冷めてんなあ！タツは！」

アハハと笑いながら彼は竜弘君の肩に腕を回す。

「って、あれタツ。お前もう友達出来たのかよ」

彼は私に目を向ける。私は軽く頭を下げる。

「あ、どうも。竜弘君とは30秒前に知り合って……」

「美弥さんって言うんだ」

竜弘君は少し微笑んで、隣の少年に言う。

「ミヤちゃんね！うん！いい名前！俺は勇人！よろしく！」

白い歯をニカッと見せ勇人は答えた。なんとも爽やかである。爽やかすぎるくらいに。



それが私たち三人の出会いであった。よく晴れた4月のこと。十年前のあの日、私たちは出会ってしまったのだ。とんでもない悪魔に。私はふと右手薬指の結婚指輪を眺める。

「勇人……ごめんね……」

1章 10年前の8月に

入学してから早くも三か月が経った。私はすっかり学校にも慣れ、楽しい毎日を過ごしていた。なんと偶然にも入学式の日に知り合った竜弘君と勇人とは同じクラスだった。勇人とはすっかり仲良くなった。今では一緒に放課後遊んだりするほどだった。あっけらかんとした勇人といると気持ちが軽く、楽しかった。こんなにも仲のいい男友達が出来たのは生まれて初めてだった私は男女間の友情ってのもアリねーなんて思っていた。

「なあ美弥。今日放課後空いてるか？」

「うん。空いてるけど？久しぶりにカラオケでも行く？」

私は頬杖をつきながら片方の手でノートを持ち、顔に風を送りながら言った。

いつもならちよっかいをかけてくる勇人が今日は何もせず突っ立っているだけだった。不気味に思った私は勇人のほうに風を送る。

「もう最近暑すぎだよねー。行き帰りが辛すぎるうー」

「……」

勇人は黙ったままだった。

「……なに、だいじょぶ？」

ノートを勇人の顔の前でパタパタと上下させる。

「あのさ……放課後、校庭の裏来てよ……」

ついに来たか……。私はすぐさま手を止めてノートを机に置く。

「わ、分かった……」

これはもうあれだろう。告白しかないだろう。放課後に校舎裏に呼び出しなんて告白以外にあり得ない。なんてベタなんだ勇人よ。ついに来てしまった。私はこの友情を楽しみたかっただけなの。どうして男と女はこうもくつつきたがるのか。なんて、恋

愛経験もない私が偉そうに思ってみる。

結局その日は一日中、上の空だった。変な緊張感が身体から離れなかった。まだ告白されると決まったわけではないのに、何と答えようか迷っている。別に勇人のことは嫌いではない。むしろ好きだ。ただ恋愛としての好きではないような気がした。だって私は竜弘君が好きだったから。入学式のあの日、一目見た時から恋に落ちていたのだ。しかしせっかく同じクラスだというのに、あの日以来あまり話せていなかった。夏休みが始まる前に何かしらきっかけを作ろうとしていた矢先にこれだ。もういつそのこと

竜弘君のことは忘れて、勇人と付き合ってしまうおうか。

「美弥……俺、待ってるから」

勇人はそう告げると、いの一番に教室から駆け出した。私は自分でも分かるほど緊張した動きでゆっくりと勇人の後を追う。その時、ドンッと誰かにぶつかった。

「ご、ごめん！ボーっとしてた！」

慌ててぶつかった相手に謝る。相手は竜弘君だった。

「……うん。こっちこそごめん。……顔色悪いけど、大丈夫？」

「えっ！？あつ、あつこれは、そのっ違くてっ……」

顔が真っ赤になっていくのが分かる。勇人に呼び出された緊張と、ぶつかった相手が竜弘君だった事が合わさり、頭が真っ白になっていく。

「落ち着いて。ゆっくり息吐いて」

「うんっ！落ち着く！落ち着きます」

フーっと大きく息を吐く。

「大丈夫？」

「……うん。なんか勝手にテンパってごめんね……」

さつきまで全身から汗が吹き出しそうだったのに竜弘君に促されるまま、大きく息を吐ききった途端に身体が軽くなる。まるで魔法みたいに。

「今日勇人と一回も話してなかったけど、喧嘩でもした？」

「えっ？ ぜ、全然してない！ してないよ！」

まるで何でもお見通しのかのように竜弘君は大きな目で私を見つめる。

「そっか。なら良かった」

「うん！大丈夫大丈夫！ちょっと用事あるからもう行くね！ほんとさっきはごめん！」

私は無理やり話題を切り上げ、駆け足で教室を駆け出す。またこうだ。いつもこうだ。竜弘君とは少し話をするだけで、心が持っていかれるような感覚になる。こんな感覚、今まで竜弘君以外に味わったことがなかった。まるでジェットコースターが落ちる瞬間のように、心が竜弘君のほうに持っていかれるのだ。私は無我夢中で上履きを靴に履き替え、校舎裏を目指す。

「はあはあっ！」

夏の照りつける日差しが急に静かになる。校舎のかげに入ったのだ。勇人の姿が見えた。なぜだかホッとした私が出た。それも束の間、なぜここに來たのか思い出し、またもやぎこちなくなる。

「そ、そんな走ってこなくても……」

「い、いやあ。最近運動不足で！」

口から出まかせを言う。その瞬間、数分前の出来事が頭を駆け巡る。

『落ち着いて。ゆっくり息吐いて』

なぜだか、ここにいない竜弘君の声が頭に響く。私は言われるがまま、フーっと大きく息を吐いた。あれ？なんでこんな時に竜弘君を思い返してるんだろ私……

「……今日さ、美弥を呼んだのはさ……」

勇人は頭をポリポリとかきながら、ぼそっとつぶやく。

「うん……」

慌てて現実に戻った私は両手をぎゅっと身体の前で握りしめた。

「言いたいことがあって……」

「うん……」

偶然にも勇人と同じタイミングでゴクリと唾を飲み込む。視線をどこに向けていいのかわからず地面と勇人の顔を交互に見る。心臓が鼓動を打つ速度が速くなる。

「俺……美弥の事が好きだ……入学式の時から。初めて会った時から。ずっと……」

「……うん」

声にならない小さな声で、返事をする。急に近くの木でセミが大きな声で鳴き始める。沈黙が続く。

「付き合ってください……!」

「っ……」

やっぱりこう来たか……私は一瞬にして思考を巡らせる。勇人とこのまま付き合ったパターンを予想する。放課後は町に行ってカラオケやゲームセンターや買い物をする。休みの日はお互いの家でゲームしたり勉強したり……あれ……でもこれって今とあんまり変わらないよな……いやでも恋人だからこれに、手をつないだりキスをしたりが追加されて……そこまで考えた瞬間、セックスが頭によぎる。まだしたことのない、大人の行為。教科書や友達の話でしか知らないもの。私にはまだまだ先の話だと思ってい

た。でも今この瞬間、急に現実的になる。今まで私の行動メニューには無かった「セックス」という単語が急に現実味を帯びて私の頭に追加される。

「ちよっ！ちよっと考えさせてっ！！」

思わず声に出てしまう。

「……分かった。待つよ」

勇人は少し寂しそうな、でもちよっとホッしたような顔で私を見つめる。

「うん。ありがと。……返事はちゃんとするから」

私はそう言い残すと、さっと振り返り来た道に戻る。今日ずっと心配していたことが予想通りに起こり、ひとまずはそれを乗り越えた。そのことで、身体力が一気に抜け落ちて今すぐに座って休みたい気分だった。気付けばいつの間にか教室に戻っていたシンと静まった教室には、ただ一人。竜弘君だけがいた。

「忘れ物？」

少し微笑んだ顔。窓から差し込む陽が逆光で眩しい。

「う、うん」

自分の席に向かいながら答える。椅子を引き、ドタッと座り込

む。

「ふう〜〜っ」

座った瞬間、思わず大きく息を吐き出してしまった。前を向く
といつも通りの光景だ。目をゆっくりと閉じて、顔を上に向ける
首の筋肉がこわばっているのが感じ取れた。大丈夫だ。世界は何
も変わってなんかいやしない。いつも通りの自分の席で、いつも
と同じ古い木の匂いや、制汗剤のシトラスの匂いが混じった教室
で、私はこうして息をしている。大丈夫だ。

ふと、ほのかに甘い香りが目の前を通り過ぎた気がした。目を

ひらいて前を見てみる。竜弘君が立っていた。

「勇人、何だって？」

「っ!？えっ何って何が？」

「……告白、されたんじゃないの？」

深く澄んだ目でジッと見つめられる。こんなにキレイな瞳の持ち主いるんだな。私はそんなことを思った。

「……うん」

告白されてから五分も経っていないのに、すごく前のように感じる。私は記憶を辿る。

「でも考えさせてほしいって答えちゃった……別に嫌いとかじゃないのに」

「怖くなったの？」

コクリと頷いた。

「今までの関係性とか全部変わるだろうし、それに私……」

わたし……なんだ？何が怖いんだ？セックス？それとも竜弘君が好きだから、彼を諦めて勇人を選ぶことが怖いのか？また頭がグルグルとし始める。

「何がそんなに怖いのか？」

「それは……私、誰とも付き合ったことないしさ……恋人になつたら、ホント全部が変わっちゃう気がして」

「……大丈夫だよ。君は何も変わらないよ」

竜弘君はそう言って、机の上に置いた私の手の上に自分の手を優しく重ねた。

「いま、肌と肌が触れ合ってるわけだけど、何か変わった？」

竜弘君の大きな手が私の手をぎゅっと握む。

「……う、ううん」

「ね？何も変わらない」

「で、でも……恋人になったら、もっと……その先とか、あるし……」

竜弘君はじっと私を見つめる。私も竜弘君を見つめ返す。竜弘君の右手がそっと私の顎先に触れる。そのまま竜弘君は顎先をそっと自分のほうへ向けさせ、ゆっくり顔を近づけてくる。私はまるで時が止まったかのように動けなかった。

10センチ、5センチ、徐々に近づく私たちの距離。竜弘君の目がゆっくりと閉じられるのに合わせて、私も目を閉じる。竜弘君の柔らかい唇が私の唇に触れるのが分かる。鼻孔をくすぐる、ほの

かな甘い良い香り。感覚は研ぎ澄まされ、竜弘君の上唇と下唇の違いもはっきりと分かる程だった。

「こういうの……とか？」

竜弘君は唇を離すと、私のおでこに自分のおでこをくっつけてつぶやいた。目と鼻の先に竜弘君のキレイな瞳がある。まるで水晶のようなキラキラと輝く深い眼。私はその瞳孔に自分の体と心ごと引き寄せられるような感覚に陥る。

「うん……」

「もう一回、していい？」



竜弘君は少し甘えたような声で言う。

「うん……いいよ……」

今度はさつきよりも少し勢いづいて唇が重なりあう。竜弘君の右手が私の後頭部を優しく撫でるのが分かった。何度か撫でてくれた後、すーっと私の右耳に手は向かう。耳たぶを軽く揉まれる。

「んうっ……！」

私は耳を触られたこと、それで自分が変な声を出してしまったこと、その二つに少し驚いて思わず顔を背けた。

「ごめんね。嫌だった？」

「いや……ちよつとびっくりしただけ……」

「君は……本当に可愛いね」

「えっ？ な、なに急にっ……」

竜弘君は私の右手をそつと持ち、そして口づけをした。

「僕の方が君を愛しているのに」

そういうと竜弘君は私に再びキスをした。

「ちよつ！ んっダメッ」

さっきの優しいキスと違い、今度は燃えるような熱いキスだった。

「ふっ……ふぁ♡」

ダメだ。思わず声が漏れ出てしまう。

「いい子にしているんだよ」

竜弘君はそう言うのと、舌を私の上唇と下唇のスキマから潜らせた。

「んんうっ♡」

身体に力が入らなかった。つま先から頭のとっぺんまで燃えるように熱く、おへその下あたりがキュンキュンと疼き始める。

『な、なにこれ！？身体があ、熱いッ』

「僕のヒミツを君に分け与えるよ」

今までに味わったことのない、なんとも言えない快感が身体中を駆けずり回る。呼吸をするごとに息苦しくなり、思わず涙が両の目から流れ落ちる。

「ひあ……やだあ……怖いよお……」

「大丈夫だ。すぐに楽になる」

彼は私の頬をそっと撫でる。

「そしてすぐに僕無しではいられなくなる。一生……ね」

その瞳は紅く、まるでルビーの様にキラキラと輝いていた。

「んあっ♡」

竜弘君の大きな手が私の胸のあたりをゆったりと擦る。人差し指でツーとまるで文字でも書くかのように愛撫する。右乳首の辺りに来た時、反射的に身体がのけぞる。快楽によるものだと思いついたのは、のけぞった後だった。おかしい。なにこれ。なにこれ。ナニコレ……ナニコレ……なんで？

「さあ儀式を始めようか」

彼はまた深く私にキスをする。もはやこれが現実なのかどうか分からなかった。

「第一の儀……」

そういうと彼は私の制服をせり上げて、両胸を露出させた。私は彼になされるがまま、おとなしく従った。不思議と怖くはなかった。

「……じつに美しい。本当に君は可愛がり甲斐があるね」

竜弘君の両手は私の両乳首をゆつくりとつまんだ。

「まだ儀式が始まったばかりだというのに……こんなにもヤラシく乳首を押っ立てるなんて」

「ふぁ……♡」

自分でオナニーの時に乳首をいじるのとは大違いだった。彼の指は器用に親指と人差し指で、私の乳首をいじるのと同時に乳輪もコリコリと責め立てた。

「ひゃっ♡だ、だめえ♡」

情けない声が出る。数時間前まで授業を受けていた席で。まるでこの学校という空間には私と竜弘君しかないような静けさだった。教室に入った時には聞こえていたセミの声も、グラウンドで部活をしている運動部の声も、渡り廊下で練習中の吹奏楽部の楽器の音も何もかも聞こえない。

「大丈夫だ。いまこの空間には僕と君だけだ」

まるで私の心の中を読み取るかの如く、竜弘君は微笑みながら答えた。

「これはどうかな？」

竜弘君は私の左乳首に顔を近づける。そしてヌウと私の左乳輪を舐める。

「ふぁぁあっ♡」

軽い電流が全身を駆け巡る。

続けざまに乳首を吸う竜弘君。チュパっチュパっとな赤ちゃんが

お母さんの乳を飲むようにむさぼりつく。舌で乳首の全周をくると責め廻される。反対の乳首は相変わらず竜弘君の大きな手の指先で遊ばれている。指先で撫でたり弾いたり、気持ちのいい部分をピンポイントで攻められたかと思うと、焦らすかの如くキユツとつままれる。そのたびに私は身体を軽くビクつかせる。

「ふふ。とても正直でヤラシイ子だ」

左乳首を舐め廻しながら、私の顔を下から覗き見る竜弘君。

「そろそろフィナーレといこうか」

彼はそう言うのと、再び乳首を舐め始める。尖らせた舌先で乳頭

をコリコリと高速で動かされる。

「あっ♡あっ♡あっ♡」

右乳首も同様に気持ちのいいポイントを高速で攻められる。

どうしてこんなにも私の気持ちのいいところを知っているのだろうか。

「んっ♡んあ♡」

頭のなかがボーっとしてきた。脳みそが熱をもって暴走しているみたいだ。軽く汗ばむくらい身体が緊張と弛緩を繰り返す。

「も、もおダメえ♡い、イキたい♡イカせて♡お願いいっ！♡」

構わず続ける竜弘君の両肩をぐっと握りしめる。気を抜くと、よだれが出そうなほどに気持ちがいいのだ。その時ピタと竜弘君の動きは止み、私の頬に口づけをする。続いて首筋にも口づけをする。そして耳元で囁く。

「まだダメだ」

私の顔をじっと見つめ妖しく微笑む竜弘君。

「これより第二の儀を始める」

竜弘君は私のスカートの中に手を入れる。だめだ。自分でもび

っしよりとあそこが濡れているのが分かっていた。

「待って。そこはダメっ」

「いい子にするんだ」

そういうと竜弘君は私の口をふさぐようにキスをする。深い深いデープキスだった。

「んあっ♡だ、だめえ♡」

竜弘君の節くれだった、それでいてキレイな人差し指が私の股間を、そっと撫でるのが分かった。くりくり……くりくり……ゆつくりと、クリトリスを愛撫する。

「ひゃあ！♡んんうっ♡ダメ！♡やめて♡」

「身体は正直だね。君のあそこが泣いて喜んでる」

まるで竜弘君の指に弄ばれているかのような感覚に陥る。彼の指の動き一つで私は悶え快楽に堕ちていく。

「ほら、クリトリスがこんなにも膨れ上がっているよ。スカート越しなのにクチュクチュ音が聞こえてくる。どれだけいやらしいんだ君ってやつは」

「ふおっ♡♡んぐうううっ♡」

私は必死に快楽をこらえる。身体中に力を入れて、耐える。

「どうして我慢なんかするんだい？ほらもつと正直になっていいんだよ。大丈夫だ」

竜弘君の指が優しくデリケートゾーンを行ったり来たりする。そのたびに私は下腹部が熱くなり、声が漏れ出る。

「んんうううううっ♡」

「いい声だ。その調子でもつと自分に正直になるんだ」

柔らかな指の腹でクツ、クツと小刻みに大陰唇を軽く揉まれる自分でもオナニーはしたことはあるが、他人に触られたのは初めてだった。こんなにも気持ちのいい事だなんて今日の今日まで知

らなかった。

「そこ♡好き♡すき♡」

「ここがいいんだね？もっともっ君を気持ちよくしてあげる」

彼は変わらぬリズムで私の大陰唇をマッサージュする。少しずつ身体の緊張がほだけていく。絡まったネックレスが解れるように私の心は融解していく。

「ふぁあ♡んん♡♡」

「気持ちいいときは、何て言うのかな？」

「……きもち、いいです♡そこ♡きもち♡いい♡」

いまの素直な気持ちを声に出した途端、更に気持ちよさが倍增した気がした。竜弘君が私の耳たぶを軽く噛む。彼の柔らかな唇がハムハムと耳たぶを刺激する。それと同じリズムで彼の指も呼応する。

「いい子だ。もっともっと素直になるんだ」

「はい♡なる♡きもちいい♡んっ♡はああっ♡」

竜弘君は私の右手を掴むと、その手をスカートの中へ持っていく。

「じゃあ入れてみよっか」

パンツの股布部分を横に逸らし、小陰唇に触れる。びっしりと濡れていた。こんなにも濡れるものなのか。彼に操られるがまま、私は自分の右手の中指をゆっくりとゆっくりと差し込んでいく。

「いつもやっているみたいにして。僕に見して」

「はい……♡」

私はまるで自室のベッドでいつもしているかのように、指をゆっくりと曲げる。

気持ちのいいスポットはなんとなくが分かっていた。その間、

竜弘君は私の顔を見つめながら再度乳首を責め始める。

「ふう♡ふう♡」

彼を見つめながら、一心不乱に私はオナニーを続ける。少しの恥ずかしさと、それを大いに上回る快楽と、そして一目ぼれ相手の彼に見られているという喜びがあった。

「ほんとに、いやらしいな。ゾクゾクするよ」

彼は嬉しそうに言う。

「だめだ。もう我慢できない」

そう言うとき、竜弘君は私のスカートの下に再度手を潜り込ませた。

「次は僕の番だ」

私の手をゆっくり引き抜くと、びっしりと濡れた指先を愛おしそうに眺める。そうすると、パクつと私の指は彼の口に入った暖かな彼の口内で指先は舌で舐めとられたり、吸われたりする。

呆然と見つめていると今度は彼のしなやかな指が一本、陰部に入ってきた。

「大丈夫？……痛くない？」

「……うんっ。だい、じょうぶ♡」

本当に平気だった。彼の指はゆっくりと奥から、そしてまた手

前へと何かを探るかのように動き出す。

「っはぁ♡」

身体にピリリと軽い電流が流れる。彼の指はピタと止まり、優しく指の腹でそこに円を描き始める。

「感じるスポット、見つけた♡」

彼は空いたもう片方の手で私の乳首を軽くつまむ。

「あっ♡♡そこっ♡すごッ♡イイ♡」

私は半目になりながら、声を漏らす。

竜弘君は変わらず、指を動かし続ける。円を描くだけでなく、

時には押したり、プルプルと小刻みに震えるような動きをさせる同時に乳首からも心地のいい刺激が続き、私は快楽が襲ってくる度に身体を身震いさせた。

「ねえ気付いてる？もう指が三本も入ってるよ」

え？いつの間に？確かめようと下を見た瞬間、ツーツと小さな涙が頬を伝い落ちる。

「……もうやめる？」

即座にフリフリと顔を横に振る私。違うのだ。これは痛みから生じる涙じゃない。身体中に快楽の波が押し寄せた結果だ。

「ダメっ。辞めちゃ、ダメ……♡」

「ふふ。分かってる。だって君のあそこが吸いついて、僕の指を離さないから」

竜弘君はそう言うと、指を動かし始める。静かにゆつくりと、それでいて確実に私の気持ちのいいポイントを突く。その手つきは、まるで何かウネウネとした生き物のようだ。

「……っ♡ああ♡んんうゝゝゝっ♡♡♡」

「君のあそこ、すごく熱いよ♡本当に可愛いなあ♡」

「ちゅ、ちゅうして♡」

私はあまりの気持ちの良さに少し怖くなり、思わずこんなことを口走った。竜弘君は少し微笑んで、黙って私に口づけをする。空いたもう片方の手で、私の後頭部は包まれる。大きく、そして暖かな、優しい手のひらだった。何度も何度も口づけをする。

「んぐっ♡うっ♡」

竜弘君はグッと私の後頭部を押さえ、深いディープキスをした彼の鼻に私の鼻が軽く押され、息をするのがやっとだった。彼のもう片方の手は相変わらず意志を持った生き物のように無規則にそれでいて確実に獲物をしとめるかの如く、私のあそこをむさぼ

っていた。

「んあああっ♡♡♡んんんんんっ♡♡♡」

突如身体に稲妻が走る。ビクンツと身体が大きくのけぞり、私は潮を吹いた。

初めての経験だった。全身に力が入らない。脚がプルプルと軽い痙攣を起こしていた。

「プはっ！」

ようやく竜弘君は私の唇を解放してくれた。

「……すごい♡イツちゃったね♡」

彼は満足げに微笑んで、もう一度私に軽いキスをした。

「ほんと可愛い♡愛らしいなあ♡」

「ご、ごめんね……自分でも制御できなくて……」

少しずつ落ち着きを取り戻してきた私は、先ほどのことを謝った。だんだん恥ずかしくなってきた。

「どうして謝るんだい？君が自分に正直になったことは、とても喜ばしい事だよ」

先ほど後頭部を支えていた手で、私の頭を優しくなでる竜弘君その優しく澄んだ瞳を見て、私の恥ずかしさは急速に鎮火された

そっか。別にいいんだ。気持ちよくなっても。

「うん……。ありがとう……」

「ふふ。どういたしまして。……でもまだ儀式は途中だ」

竜弘君の顔つきが打って変わり真面目な表情へと変わる。

「第三の儀がどういったものか。今の君には、分かるね……?」

その言葉の意味が、今の私にはどういふことか深く理解できた私は竜弘君の股間へと目を落とす。ズボン越しでも分かるほど彼のモノは大きく隆起していた。私はそれを見て静かにうなづく。

「……それじゃあ第三の儀を、はじめようか」

私は彼の股間へとゆっくりと手を伸ばす。先ほどまで落ち着いていた心臓の鼓動が再び速くなる。ドクドクドクと、速くなる。

男兄弟のいない私にとって、それは父親のものしか見たことが無かった。しかも遙か昔のことで、ぼんやりとした印象でしかない。昨日までの私にとってそれは保健体育の教科書で見たインクの集合体でしかなく、ただの概念でしか無かった。それがいま目と鼻の先にそそり立っているのだ。

恐る恐る指先を一番盛り上がった先端部分に触れる。ズボン越

しにも熱が伝わる。

「熱い……」

「……君が、そうさせたんだ」

彼はベルトとフック外し、ズボンのチャックをゆっくりと下げる。シンプルなダークグレーのボクサーパンツの布越しに、彼の_こそれがクツキリと浮かび上がっていた。私は思わず生唾を飲み込む。

「……触って、ほしい」

ゆっくりと人差し指で触れる。続いて中指、薬指、そして手全

体で彼のものを包み込む。

「こんなおつきくなるんだ……」

それは私の手の直径よりも遥かに大きかった。ズボン越しに触れるよりも、更に熱く、脈打つ様子すらも感じ取れた。

「……怖い？」

「……うん。少しだけ」

でも身体は心とは裏腹に動き出していた。彼のボクサーパンツのウエスト部分に手をかけ、ゆっくりと引きずり下ろす。グググッと引きずり下ろしたパンツに引っかけ、彼のそれは大き

くしなる。まるで鉄の棒のように硬かった。彼のうつすらと茂った陰毛ごしに竿の根元部分が見える。私は構わずパンツを膝まで引きずり下ろした。瞬間、それまで感じていた引っかかりがスルッと抜け、同時に彼のそれは大きく跳ね上がる。さっきまでは感じなかった竜弘君のほのかに甘い秘めた体臭と、熱気で顔が覆われた。三度ほど瞬きをして、ゆっくり両手で包み込んだ。これが……これが竜弘君の、おちんちん……。

「そうマジマジと見られると照れるな」

「ご、ごめんっ！そうだよね！」

私は自分が思っていたよりも近くで見えていたようだ。立ち上がり、急いで一歩引いた。その時、思わずよろけた。先ほどイッた時の脱力感が、まだ少し続いていたのだろう。

「大丈夫？」

竜弘君は私の肩を支え言った。

「う、うん……」

そのまま彼は私を机の上に寝転ばせた。とても自然な流れで、また先ほどと同じく淫靡な空気が漂い始めた。

「怖がらないで。さっきじっくりと解したから心配ないよ」

彼は優しく私の頬を撫で、キスをした。そのまま首筋、鎖骨、そして右胸へと下降していき乳首を舐め始める。

「んっ♡」

また快樂の波が立ち始めるのを感じた。彼は再び大きな手で私のおそこを愛撫し始める。ぴちやぴちやと音を立てるのにそう時間とはかからなかった。

「ほらね？大丈夫」

「うんっ……♡」

「じゃあ、挿入れるね？」

「うん……来てっ♡」

私は思わず目をつぶり、竜弘君の手をぎゅっと握りしめる。

その時だった。さっきまであんなに静かだったはずの教室が、急に元の気怠い夏へと引き戻された気がした。セミの声、運動部の声、吹奏楽部の楽器の音、遠くで聞こえる足音。そんないつもの通りの放課後の教室。

「……え？」

私が目を開けようとした瞬間、竜弘君に再び唇を奪われる。

「邪魔が入った。残念だが、ここまでみたいだ。……でも大丈夫だよ。君と僕の契約は、今日ここで結ばれたからね。残りの儀式は日を改めて、また」

ハッと目が覚める。音だけでなく色合いまでもが先ほどのセピアがかったものから、極彩色の現実味のあるものへと変わっていた。私は自分の席で眠っていたようだ。教室には私以外には誰もいなかった。なぜだか下半身が異様に疼く。どうしてここに居るのだろうか……何かすごく大切な夢を見ていたような気がする。

ガラッと勢いよく扉が開く音がした。音の方へと顔をやると、
勇人がいた。

私は夢見心地から急速に現実へと引き戻される。そうだ。数時間
前、私は校舎裏で勇人に告白されて……

「い、いたのか……」

「勇人こそっ。帰ったかと思った……」

「ちょっと、忘れ物取りに来た……」

気まずい沈黙が流れる。もう一度勇人の方に顔をやる。顔を見
た瞬間、先ほどまで異様にこわばっていた身体が一瞬にして安心

感に包まれるのを感じた。あれ……どうして？私、勇人といるとホッとする……

「……返事、いつでもいいからっ！」

勇人は恥ずかしそうに言い放つ。私はどうしてだか、勇人が恋しかつた。数時間ぶりに再開しただけなのに、なぜだか恋しくて仕方がなかった。

「あっ……そのことだけど……」

私は大きく息を吸って、吐きだした。

「いいよ。……付き合っても」

「え……？マジ？」

思いもよらぬ私の言葉に、勇人はあんどぐりとしていた。

「うん……まじ……」

そうして私たちは恋人同士になった。何か大切なことを忘れて
いるような、そんな胸のしこりを抱えたまま……

2章 初めて

勇人と付き合い始めて、早いもので5か月が経ち、12月を迎えた。季節はすっかり夏から冬へと移り変わり、話題といえはクリスマスのことや、冬休みのことばかりだった。私と勇人は恋人同士になったあの日から、さして変わりはない。いつも通りバカ言いがあって、ふざけあって、そんな楽しい毎日を過ごしている。変

わったことといえは休みの日に2人きりで遊ぶようになったぐらいだった。

「今日、一緒に帰れるか？」

そんないつも通りの授業終わり、勇人が話しかけてきた。

「ああオッケー。帰れるよ」

「じゃあ今日家来ねえ？」

「うん。いいけど」

勇人の家には何度も行ったことがある。とはいえいつも私の友達のアケミやユカ、勇人の友達のコウキやリョウがいた。そして

たまに竜弘君。基本的に誰かしらがいる。だから一人で勇人の家に行くのは初めてだった。

「今日お母さんいないの？」

勇人の家庭は父、母、勇人の三人暮らしだ。勇人のお母さんは専業主婦をしているため、基本的に家にいる。お茶目でいつも優しく美味しい手作りお菓子をふるまってくれるため、私たち女子には大人気だ。

「ああ。今日から三日間北海道に旅行だつてさ。いいよなあ」
「そうなんだ。ちゃんと戸締りとか火の元とか注意しなよね。あ

とカップラーメンだけじゃなくてサラダとかも食べること」

「りょーかいっ！任せなって！」

ふあゝっと伸びをしながら、気の抜けた返事をする勇人。なんだか私たち夫婦みたいだななんて思った。窓から冬の寒々しい陽光が微かに入ってくる。私はぼんやり窓の外を眺め、鈍い空の青を見つめた。

その日の放課後、私と勇人は一緒に帰った。学校からバスに乗り、最寄りの駅まで向かう。そこから電車で4駅先が勇人の家の

最寄り駅だ。ドアトゥドアで1時間弱といったところか。私の家は正反対の所なので少し帰るのが面倒だ。まあ明日は休みだしいいか。なんてことを思いながら、勇人の家の最寄り駅に到着する何度も来ているとはいえ二人きりなのは何だか新鮮である。

「そういえば今日竜弘君休みだったね」

「ああそういえばそうだな。あいつ小学生のころから冬場は休みがちなんだよ。身体弱いらしくて」

「そうなんだ。心配だね」

勇人は少しムツとした顔になり、私に詰め寄る。

「俺のことは心配じゃないのかよお」

「あんたは元気でしょ。今年風邪の一つも引いてないくせに」

「俺だって風邪ぐらい引くわ！」

そんな話をしていると、あつという間に勇人の家の前に着く。

築10年ほどのグレーの外装の、三人暮らしには十分すぎるほど大きい一軒家。それが勇人の家だった。

「お邪魔しますあす」

「誰もいないけどな」

いつもの癖でつい言ってしまった。当たり前だが誰もいないの

だから返事などない。いつもなら勇人のお母さんが優しい笑顔で迎え入れてくれる。いつだって上機嫌で人懐っこい勇人のお母さんと話していると何だかこっちまで元気になる。その度に勇人は明らかにお母さん似だなと思うのだ。何というかゴールデンレトリバーのような、大型犬気質なところが似ている。二階に上がリ廊下の一番奥の部屋が勇人の部屋だ。9畳ほどはある高校生の部屋にしては広めの部屋。ベッドと勉強机と緑色の円形カーペットに小さなローテーブル。ベッドとローテーブルを縦で結ぶようにテレビ台と30インチのテレビがある。特段変わったものではなく

ザ・シンプルな男の子の部屋というような感じだった。さっぱりとした勇人らしい部屋だ。日当たりもよく私は初めて来たときから居心地がよく、純粋に好きな空間だった。

「飲み物あったかい緑茶と紅茶どっちがいい？」

「ああ、緑茶で！」

「りょーかい。くつろいで。あ、あと暖房」

「はい。悪いね」

勇人は下へ降りていく。私がジュースがあまり好きではないことや、寒がりなことを覚えていてくれる。何も言わなくても自然

とそういう細かな気遣いをしてくれる勇人の優しさが好きだ。私は暖房のリモコンを手に取りオンにする。改めてこの家には私と勇人しかないという事実について考えてみる。実は私たちはまだセックスをしていない。キスまではしたのだ。といっても先月行った遊園地の観覧車の中で、ようやくだ。手をつないだのは遊園地に行く1週間前だ。恐らくだけど、今どきの高校生にしてはいささかゆったり目なペースだと思う。同じクラスの彼氏がいる女友達の話の聞いていると、わりと皆サクッと済ませているようだった。勇人もそういう雰囲気たまに出すのだが、お互い恥ず

かしくなつてすぐにふぎけあつてしまう。私自身も告白されたときは、そういった性的なものに少し恐怖心を感じていたが、勇人のことを深く知った今となつては、いつでもどうぞといった感じだ。ただ、やっぱり初めては勇人から誘つてほしい。そんなことをぼんやり考えていると、勇人が戻ってくる。

「おまたせ。部屋寒くない？もつと温度上げていいよ」

「ありがと。でも今日あったかいし大丈夫。あ、そのお菓子！こないだ出たばっかのやつ！」

「そうそう。こないだ話してたやつ。昨日寝る前にコンビニ行っ

て買っておいたんだ。食おうぜ」

私たちはいつもと同じようにテレビゲームをしながら、お菓子をつまみ、他愛のないことを話し合った。私は勇人の近くでカーペットに座り、勇人はベッドに座る。それがいつもの定位置だった。いつもと違うのは他のメンバーがいないこと。ただそれだけなのに何だか浮足立って仕方ない。いつもなら勝てるはずのゲームで連敗している。

「ちよっとお手洗い借りるね」

私はそう言い残し、そそくさとトイレへと向かう。便器に腰かけ、スマホで検索をする。「彼氏 初エッチ」「初エッチ 切り出し方」そんな言葉を検索し、適当なページを見た。なんでだろう。私こんなエッチしたかったんだ……自分自身の隠された気持ち。ちがトイレという誰もいない守られた空間内で発露し始める。でも……でも、私からは誘えない。そんな勇氣は無かった。ふう……とりあえず深呼吸をして、おへその下あたりを2回ほどグツと押さえる。高校に入学していつからか、私は息が詰まった時や悩んだ時にはとりあえずこれを行う癖がついた。誰に教わった

か忘れたが、この方法は私の気分の切り替えに非常に役立っている。深呼吸をした後に、おへその下あたりを押さえるのがポイントだ。それだけで気持ち が 凜とする気がした。

『よし。悩んでも仕方がない。こういうのは縁だから、気長に待とう。成り行きに任せて……』

自分の中でそう結論付け、私はトイレを出た。勇人の部屋に戻ると、勇人はベッドで仰向けになっていた。目は開けているから起きてはいるらしい。

「眠い？」

「いや眠くはない」

「そっか」

私はいつも通りの場所に座り、後ろのベッドにもたれかかる。ちようにど真後ろには仰向けになった勇人の肩がある。テレビからゲームの待機画面の音楽が流れていた。耳を澄ませると勇人の呼吸音が聞こえる。吸って、吐いて、吸って、吐いて。その繰り返しに何の気なしに私も呼吸を合わせてみる。吸って、吐いて、吸って、吐いて。それを何度か繰り返し、完全に勇人の呼吸と私の呼吸が合わさった。勇人は気付いているだろうか。そんなことを

考えながらボーっとテレビ画面を見ていると、勇人の手が私の後ろ髪に触れた。

「いつも、髪キレイな」

「まあね」

流行りのお笑い芸人のネタを入れてみる。しかし何の反応もなかった。いつもなら勇人も負けじとネタを披露するはずなのだが……不思議に思い、後ろを振り返ろうとした。その瞬間、勇人が私の身体に寄りかかってきた。いやこれは寄りかかっているのではなく、バックハグか。私は冷静にそんなことを思った。

「ちよつ。なに急に。焦るんですけど」

「ごめん。ちよつとこのまま」

「……まあ、いいけど」

少しだけ恥ずかしくもあり、嬉しくもあった。いつもならふざけ合う仲の勇人が勇気を出して甘えてきてくれたのだ。お互いに無言のまま時は流れる。家の前を小学生の子供たちが、はしゃぎながら通っていく声が聞こえる。きっと世間は今頃夕飯時で、家路に向かう人や料理を作る人、そんな暖かな時間がこの町全体を覆っていた。そんな中、私たちは二人きり同じ空間で音も出さず

に抱き合っていた。勇人の少し荒い鼻息が耳元に当たる。

「……キス、していい？」

普段声の大きな勇人が、耳を澄ませていなければ聞き取れないようなかすれ声でささやく。

「……うん。いいよ」

先ほどまでやけに冷静だった私の鼓動は急激に速まっていく。

勇人は私の顔に近づくため少しだけ前に這いずったかと思うと、私の頭に手を当て上を向かせた。私の視界はテレビ画面から外れ天井へと移り変わる。一瞬、白い天井とシーリングライトが見え

たかと思うと、上から目を閉じた勇人の顔が現れ私の顔を覆う。

勇人は私にキスをした。

「んっ……」

いきなりで少し驚いた私は思わず小さな声をもらす。お互い顔の向きが反対を向いているため、勇人と私の唇はちぐはぐに交わっていた。先ほどまで食べていたチョコ菓子の甘い味がする。勇人は私の頬に両手をピタとはわせて、何度もキスをした。

「く、くるしいかも」

私は勇人の唇が離れたすきに、そう言った。

「あ、ごめんっ……！」

勇人は慌てて顔をどけ、体を起こす。私は顔を起こし、後ろを振り向くと勇人は胡坐をかいて恥ずかしそうに俯いていた。目と口を真一文字に閉じ、自分の行動を反省しているようだった。

「……」

私はそんな勇人を黙って見つめる。まるでいたずらがばれて、ばつが悪そうにしている大型犬のようだった。

「こっち、来て……俺のとなり……」

「……うん」

ゆっくり立ち上がりベッドに上がる。セミダブルのベッドの上を膝立ちになりながら、何歩か進む。勇人は硬めのマットレスを使っているらしく、思ったよりも膝は沈み込まなかった。壁際にくつつき、相変わらず俯いている勇人の隣に私は座る。

「もっかい、していい？」

「うん……」

勇人は顔を私の方に向け近づいてくる。私も目を閉じて待ち受ける。今度はちゃんとお互いの唇が噛み合う。何度目かのキスの後、勇人の舌が私の口内に入ってくる。チョコの甘い味と勇人と

私の唾液が混ざりあう。お互いの舌が絡み合って、いやらしい音を立てる。勇人の少し乾燥している薄めの唇の感触が、私の唇を通して伝わってくる。

「なあ……エッチしたいって言ったら、怒る？」

キスを止めて勇人はそう言った。耳まで真っ赤だった。

「……エッチ、したいの？」

「うん……したい。すごく、したい」

上目づかいで私に懇願する勇人。その瞳からは緊張と期待が読み取れた。

「……いいよ。しよつか……」

私は数秒考えたあと、了承した。求められる喜びや勇人が可愛いという感情で、なんだか胸がいっぱいだった。思わず私は勇人を抱きしめる。すると勇人は更に強く私を抱きしめるのであった。

「はあ……好き。めっちゃ好き」

勇人の片手は私の後頭部を大きな手で抱きかかえながら言う。

「私も……好きだよ」

抱きしめられながら私も勇人の言葉に答えた。ふとそのとき、私を抱く勇人の手の感覚にデジャヴを感じた。勇人の手は大きくそして骨ばっている。また指の一本一本が太い。中学まで野球少年だった彼の手のひらは、その時の名残か指の付け根あたりに硬くなっている部分があった。いかにも男性といった感じの彼の手に触れるたび、いつも私はドキツとする。でも今感じたデジャヴは違った。大きさは彼の手と同じくらいだが、肌の感触が全く違った。何なら私の肌よりも繊細でキレイな印象を持ったその手は一体誰のものなのだろう。そしてこのデジャヴの正体は何なのだ

ろう。なぜこんなにも胸が苦しくなるのだろう。私の意識は、勇人の手からそちらへと移っていた。

「シャワー、借りていい？」

しばらく無言で抱き合ったまま、私は勇人に聞いた。

「うん。……タオル出すね」

そう言って勇人は立ち上がり、扉の方へと向かう。

「着替え、俺のでもいい……？」

「あゝ……下着だけ、買ってくる」

私も立ち上がりリュックに手をかける。勇人の家から歩いて五

分程のところにコンビニがある。そこに下着だけ買いに行こう。

「あ、俺も行くよ……アレ、買わなきゃ……」

お互い一瞬無言になった。そうして私たちは家を出て、二人でコンビニへ向かう。空はすっかり暗くなっており、冬の冷たい風が吹いていた。勇人のコートのポケットの中で、私の手は大きくて暖かい手に包まれていた。

それから一時間後、私たちはコンビニへ行くついでにファミレ

スで夕食を食べ、また勇人の家へと戻った。結局コンビニでは私が下着を買っただけで終わった。なぜならばコンビニに勇人が求めるコンドームは売っていなかったのだ。

普段気にしていなかったのだが大抵のコンビニには数種類のコンドームが販売されている。私たちが行ったコンビニにもコンドームは置いてあった。しかし問題は勇人のサイズに合うコンドームが無かったのだ。もちろん勇人の裸も見たことがない私はそんなことを知らなかった。私が下着を買い終わっても、まだコンドームの棚の前で固まっている勇人に声をかけて発覚したのだ。

「お待たせ。って何してるの。そんなとこで突っ立って」

「いや……あの、さ……多分なんだけど、俺これじゃダメだわ」

「……？ダメって、なにがダメなの……？」

「あの……サイズ、的な……」

頭をポリポリとかき恥ずかしがる勇人。

「勇人には大きすぎるってこと……？」

「そうそう俺にはちよっと、って逆だよっ！」

私は思わずボケをかましてしまう。勇人はいつも通りのキレのいいノリツツコミを返す。

「多分薬局行かなきゃないっほい……」

というわけで私たちはそこから十分ほどかけて薬局まで買いに行ったのであった。私は何も気にしていない風に装っていたが道中も、そして勇人の家に帰ってきた今現在も、内心ドキドキしていた。

「お風呂、先どうぞ」

勇人にそう言われ、私はシャワーを浴びた。勇人が用意してく

れたフカフカのバスタオルに包まれながら、勇人が普段着ているであろう私には大きすぎるスウェットを横目に脱衣所の鏡の前に立つ。畳まれたスウェットを手に取り私はそれに顔をうずめる。柔軟剤のいい香りがした。勇人の匂いだ……。私は布越しに勇人を感じながら、先ほどまでのことを振り返る。

『あの……サイズ、的な……』

『多分薬局行かなきゃないっばい……』

勇人の恥ずかしそうな表情と声が頭の中で再生される。大丈夫だろうか。上手く出来るだろうか。痛くないだろうか。私は不安な気持ちをかき消すように、大きく深呼吸をして、それから下腹部をグツと押さえた。スーっと不安が消えていく。よし、大丈夫だ。きつと何とかなる。そう意気込んで勇人の部屋へと戻る。

「か、かわいい。てか風呂上り、めっちゃエロい……」

勇人は見惚れながらそう言うのを抱きしめて、ドタドタとお風呂場へと向かっていった。

そうしてようやく準備が整った。部屋は私の要望で、お互いがぼんやり見える位の明るさにしてもらった。私たちは清潔になった身体で、まずは服を着たまま抱きしめあった。十分ほど経っただろうか？時計の針が見えないため分からない。でもそのあいだ中ずっと、勇人の心臓がドクドクドクドクと大きく動くのを、服越しでも感じた。

「俺、初めてだから……めっちゃ緊張してる」

「私も……同じ……」

「……やさしく、するから……」

勇人は私の唇と首筋に軽くキスをする。そのままどんどん下っていき、スウェット越しに胸を揉まれる。

「見て、いい？」

「うん……いいよ……」

私はスウェットを脱がされ、上半身裸になる。

「きれいだ。すごくきれい……」

勇人は恍惚とした顔で、つぶやいた。そのまま私の両乳首を優

しく触り、尖らせた舌先で右乳輪をツーっと走らせた。

「んっ……♡」

私は小さく声を漏らす。そのまま押し倒され下も脱がされる。

乳首を舐められたまま、勇人の大きな手に私の下半身はいやらしく撫でられる。腰、内もも、そして恥丘あたりまで、ゆっくりと味わうかのように勇人の手の平は動く。そうしてついに私のあそこへたどり着いた勇人の手は大陰唇に優しく触れた。

「ふぁ♡」

彼は乳首を舐め続けながら、器用に手を動かす。太くてざらつ

いた指が、そっとクリトリスを突く。何度かソフトタッチした後
勇人の指が小陰唇に延び膣に向かう。ゆっくりと指が入っていく。
「いたく、ない？」

「うん……まだ、大丈夫」

そーっと手を動かす勇人。指の腹が私から出た愛液を絡ませながら、膣内をなぞる。

「舐めても……いい？」

「……うん」

私は一瞬考えたが了承した。勇人の顔はそのまま私のあそこへ

向かう。目を閉じて下半身に神経を集中させる。ぴちよっぴちよっ、ジュジュツという舐める音が聞こえてくる。大陰唇から小陰唇へと舌が動く。そしてクリトリスをそっと舌尖で突かれる。何度も何度も縦に横に、舌は動く。

「あっ♡んんっ♡」

私はそのたびに声を漏らす。じんわりとした心地よさが身体全体を包み込む。

ピタッと動きが止むと今度はパクッと口先でつままれる。弱めの力でクリトリスを吸われる。少しずつその力は強くなり、それ

と比例するように快感も強くなる。

「ふうっ♡」

勇人は私の喘ぎ声を聞くと、我慢できないといった感じで私の両手を上に伸ばし乳首を責め始める。乳首とクリトリスの三点攻めに思わず、軽く身をよじろうとする。すると今度はそれを制御するようにクリトリスを甘噛みされた。私の身体はビクンと弾んだ。

「はあはあはあ♡」

段々と息が荒くなっていく。勇人はお構いなしに、クリトリス

を舐めながら片方の手を膣口に持っていく。ゆっくりと勇人の太い人指し指が入ってきてゾリゾリとスポットを刺激される。やや気持ちのいいスポットと外れた場所ではあるが、クリトリスの刺激と交わっているせいか、問題なく気持ちがよかった。

「ふうう♡ふうう♡」

「すごい濡れてきた……」

勇人は顔を上げて真剣な顔で言う。私は少し恥ずかしくなって顔を背けた。

「ゴム付けるから、ちょっと待ってて」

ベッドの下に置いてある薬局のレジ袋からコンドームを取り出す勇人。部屋の微かな明りが、ラメ加工してある黒色のコンドームパッケージに反射する。『L』と書かれた金の文字が見えた。私はコンドーム装着の様子が気になって身体を起こした。勇人は服を脱ぎ、残すはパンツ一枚だった。野球で鍛えたプリットしたお尻が可愛かった。

「そ、そんな見んなよっ」

私の視線に気づき、前を隠そうとする勇人。

「私も見せたんだから、いいじゃん」

そう言って勇人の前にグツと身体を乗り出すと、ライトブルーのパンツ越しにどっしりと勇人のあれが膨張していた。かなりの太さだと思われた。

「でっ！……はいる、かなあ？」

思わず声に出てしまう。

「痛かったらすぐやめるから」

コンドームを装着し終えた勇人は、私の方へ身体を向ける。透明のコンドーム越しに見えるそれはまるで凶器の様にそそり立っていた。戦闘状態の男性器を見たことがなかった私は少し感動す

ら覚えた。

「こんな、でっかくなるんだ……」

私はそーっと勇人のそれを触ってみる。熱を持ったそれはまるで生き物のようでドクドクドクドク脈打っていた。思い切ってグツと握ってみるが、親指と人差し指がくっつかないほどの太さだった。こ、こんなのムリ……ちよっと肝を冷やした。これが今から私の中に入ってくるの？

「じゃあしよっか」

勇人はそう言うと、私にキスをした。私は覚悟も決まってい
まま、勇人のリードに従う。仰向けになり乳首とクリトリスを責
められ、またもや愛液があふれ出るのを感じる。勇人は指でしつ
かりと膣口を解し、準備が整ったのか亀頭をピタと膣口に押し付
ける。まだ入ってもいないのに、熱を持った亀頭の存在感が分か
る。私は徐々に呼吸が浅くなる。

「それじゃあ、挿入るね？」

ふっ！私は瞬間、息を止める。身体に力を入れようとした時、

メリツメリツとあそこがえぐられるような感覚がした。遅れて引き裂かれるような鋭い痛みが全身を襲う。

「んんっくっくっ！」

私は目に涙をためながら、歯を食いしばる。

「や、やっぱ痛いよなっ！すぐ辞めるからっ！」

「んんっくっくっ！いいからあっ！っ、つづけ、てえっ！」

なぜそこで辞めると言わなかったのか、自分でも不思議だった今ここで辞めてはいけない。その瞬間はなぜか、そんな思考でいっぱいだったのだ。私は呼吸の浅さに気付き、思いっきり息を吸

って、そして吐いた。それを二度ほど繰り返し、下腹部をグツと押さえる。いつもとは比べ物にならないほど強く、そして深くまで抑えこみ息を吐く。その瞬間も勇人の大きなソレは身体に侵入し続ける。私はその30秒足らずの痛みがまるで永遠のように感じられた。

「ぐっううううっ！」

頬を涙が伝う。セックスってこんなにもイタイんだ。私は神様に祈った。ああ神様お願いします。助けてください。どうか、どうか私をお助け下さい。普段神になんか祈ったこともないのに、

こんな時にだけ祈るなんてホントどうしようもない人間だ。でも
そうでもない、この痛みに耐えられそうになかった。その時
閉じているはずの視界が明るくなる。おかしい。目を閉じたまま
なのにどうして。

『大丈夫。息を吸って吐いて。それを繰り返すんだ。身体の力を
抜いて。痛みの奥に快感がある……天国と地獄は、隣り合わせな
んだ』

だれ？あなただれなの？私の脳内に語り掛ける、その声の持ち
主に向かって私は叫ぶ。

『さあほら、息を吸って、吐くんだ』

私は頭がぐちゃぐちゃになりながらも、その声の持ち主の言うとおりにする。

すると呼吸をするごとに、さっきまでの痛みがスーッと引いていく。砂浜に押し寄せた波が舞い戻るように。

「大丈夫っ？痛く、ない？いまぜんぶ、挿入ったっ」

勇人の顔はいつしか私の顔の前に来ていた。まだ始まったばかりだというのに、彼の顔はうつすらと汗ばんでいる。

「はっ！……はあはあ……うん。だい、じょうぶつ。全部挿入してるの？」

「うん。挿入ったよ。中、めっちゃ温かい……」

何も動かずじっとしているだけなのに、なぜだか勇人は気持ちよさそうな表情をしていた。その顔を見て、改めて冷静に勇人のものが私の中にズッポリと挿入されているという現実には、胸がいっぱいになった。



「挿入って、る……挿入ってるよ♡勇人のおっきいの、私のナカ
にっ、挿入ってるよ♡」

私はよろこびの涙を流しながら、勇人の顔をマジマジと見る。

勇人はそっと私にキスをした。

何度も何度もキスをして、舌を絡めあい、ぎゅっと私を抱きしめた。勇人の脈打つそれが、膣内でドクドクドクドクいつてるのが分かる。とても熱い、大きな、もう一つの勇人。いや、勇人そのものが、私の膣内で鎮座していた。私の身体が彼を受け入れるのが分かった。

「ちょっと、動くねっ」

勇人はそう言うのと、少しだけ腰を手前に引いた。

「あっ♡……んんうっ！♡」

同時に勇人のそれも手前へと動く。亀頭と竿の間にできた深い段差が膣内のヒダを掠めていく。その際に私は快感が生じるのが分かった。

「ふうう♡ふあっあああっ♡」

先ほどまでの痛みは消えたわけではなかった。というより、依

然として痛い。気を抜いたら、今にも泣き出しそうだ。でも微かに、ほんの微かに、その奥に快感があるのが分かった。

「ううっ！」

勇人の野太い声が脳内に響く。勇人も気持ちよさそうだった。今年の春までは全くの赤の他人だった私たちが、今こうして一つになっている。そんな小さな奇跡に私は、この世の素晴らしさを感じた。勇人はまた動く。手前に引いた分だけ、押し返す。ぎこちなくて、全然スムーズじゃなくて、本当にゆっくりとした動きだ。

「はあっ♡ふうう♡ふあっ！♡」

そうしてまた私の膣内のヒダは勇人のそれに絡みつく。まるで
お帰りともいうように迎え入れる。つま先から指先までゾクゾ
クとした快感が走りぬける。痛みを感じるよりも早く、私の脳
内にたどり着く。

「ぐうううううううっ♡」

声にならない声を漏らしながら、私は快感を全身で味わってい
た。勇人も少しずつ要領がつかめてきたのか、動きが滑らかにな
る。引いて、押して。そのたびに快感、そして後から少しの痛み

が押し寄せる。

痛いのか気持ちがいいのか、もうよく分からなくなってきた。

女性と違い一身に快感だけを浴びているであろう、男性である人の様子も変わってきた。見たことのない真剣な表情で、快楽を我慢しているかのような切ない顔つきをしていた。

「あぁっ、俺もうイキそうっ」

「うんっ！いいよっ！イッていいよっ！」

私はそんな勇人を見て、たまらなく愛おしい気持ちがあふれ出てくる。勇人の背中に手を回し、強く抱きしめる。そのまま私に

覆いかぶさるように勇人の大きな上半身がのしかかる。心地のいい重さだ。これが愛の重さだ。私はそう思った。

「ううっ！イクっ！」

勇人は私の胸に顔を押し付けながら果てた。あとには二人の激しい息遣いだけが部屋に残った。